

地方だより

東大地球物理学教室

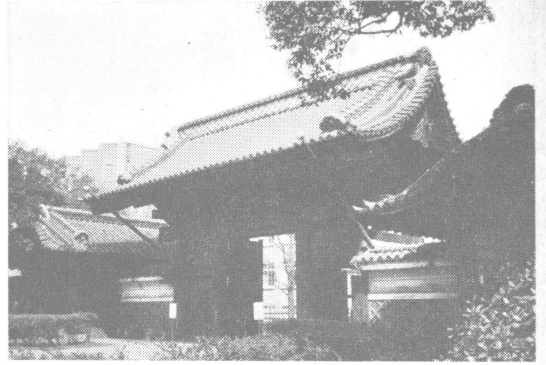
気象研究室

「いい天気だな、外ですこし運動をやりようよ」「それがいいや」とばかりバットやボールを持ち出して、教室前の庭と言うより、広っぱと言った方がピッタリした感じの所に出て行く。春の明るい日なのに、暗い北向きの部屋に1日中くすぶっている気にもなれない。それに運動だっしてなければ体に悪かろう。

この地球物理学教室は東大のはずれにある。つまり、赤門で象徴され、前田百万石邸跡のコンクリート建築群から離れた場所にある。向ヶ丘の浅野邸跡に木造2段建と平家建の2棟が我々の巣立ち、現に研究に従事している仕事場である。外観は数年前に塗り変えたので新しそうだが、昭和16年の普請だから廊下を歩いてもギシギシする。文献や資料の大部分が2階に置かれているので、大地震でもあったら1階は危険らしい。この建物の中に、地震学、地球力学、海洋学、気象学、地球電磁気学の5研究室が割拠している。最近は人員も増え、理学部1号館にも間借りしている。

われわれの気象研究室は、この地球物理学教室の中の1分科として存在する。そしてこの中にはさらに2つの分野に大別されている。すなわち、気象力学と物理気象の両部門である。そこでこの2つの部門で近頃やっている研究を紹介することにしてみる。

気象力学部門では、数値予報の名で代表される体系に基づいた研究がなされている。気象台や気象研究所の人達とも共同して種々の問題に取り組んでいる。最近では、低気圧および台風の進路予報、雨の予報、地形によるジェット気流、凝結熱や輻射が気圧場に与える影響などの、基礎的な理論を主として扱っている。前から気象力学の理論的な考察を基盤としているが、近来はこれに



赤門

実測資料を使い、天気図によって検証する傾向が強くなって来た。しかし予報現業に追われないので、比較的時間をかけ、場所を極東に限らず綿密な検証ができるのが大学での研究の特徴かも知れない。しかしその反面すぐに現業化するには技術的に複雑な、未消化の点があるのは仕方がない。その例には、台風の進路予報を現業化するにも技術改良に長時間費している。ルーチンのものではないが天気図もずいぶん書く。理論の検討には北アメリカ大陸の天気図がよく引かれる。極東の天気図にもこれと同じ程の分布で資料が入ればよいのにと皆が話している。

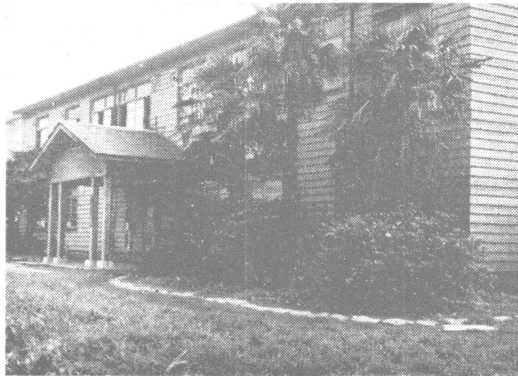
一方物理気象部門では、実験が主となっている。こちらは理学部1号館の実験にはまことにつごうのよい設備がある。まだ数年しか経っていないので、実験器具がやっと整備された所であるが、仕事はなかなか活潑である。凝結核・昇華核の組成をしらべたり、過冷却微小水滴の凍結温度測定、食塩水撒布による霧滴の成長等々、雲物理が大部分である。こっちは気象研究所の人々と降水機構に関する議論を活潑に交わしている。

両部門を合わせて、気象研究室の陣容は、正野・磯野両先生の他に助手、大学院学生、研究生等で10人程である。やりたいことはもっともっとあるのだが、人員はそんなに多くないし、研究費は御多聞にもれずそんなに多くない。紙と鉛筆、そして頭を使ってやって行くより仕方なかろう。

)(

余談だが、今年度の総会は東大でやるので、幾人かの人々はその準備に今から動き廻っている。東大の5月祭とカチ合いそうだとか、プログラムの編成だとか。しかしそんな毎日の中にも研究会やら討論やら、また運動などが織り込まれて春の日が次第に深まって行く。

(加藤喜美夫)



地球物理学教室